

韓国の生殖ツーリズム 「グローバル化」する代理出産 溯上恭子（日本文化人類学会）

グローバル化時代の今日、自国で挙児の得られない不妊夫婦が、国家間の経済格差や規制格差を利用して、海外に渡航し不妊治療を行う「生殖ツーリズム」(reproductive tourism) が盛行している。一般に、生殖ツーリズムは、不妊に悩む夫婦が、代理出産や卵子提供といった自国では禁止されている不妊治療が、合法的により容易に受けられる国に渡航して挙児を得ることと考えられている。だが、韓国の生殖ツーリズムはそうしたものに止まらず、不妊夫婦、代理母、卵子ドナーの三者が、医療ツーリスト、海外出稼ぎ、国際養子縁組、国際結婚等のかたちをとって、国境を超えた不妊治療に関わるものである。本報告は、そうした韓国の代理出産ツーリズムに焦点を当て、グローバル化時代の韓国における生殖ツーリズムの実相を解明するものである。1990年代初頭から今日に至るまでの韓国の代理出産ツーリズムには、次のような推移が見られる。その最初は、1990年代初盤に日本国内での実施が禁じられている代理懐胎の技術を求め、代理母を伴って韓国に渡航した邦人夫婦によるものである。その次は、1990年代後半以降マスコミで盛んに報じられるようになった、代理出産の報酬を目当てに不法入国してくる中国同胞女性等(「朝鮮族シバジ」)による出稼ぎ型代理出産である。そして、その次に現れたのは、代理出産に対する規制を欠く「生命倫理法」の施行(2005年)と、中国の経済発展に伴う安価な中国同胞代理母の離反を背景として、2007年より表面してきた、韓国人不妊夫婦による国際養子縁組や国際結婚を装った代理出産ツーリズムである。このタイプの代理出産ツーリズムは、次の二種類に大別される。その一つは、ブローカーの手配の下に不妊の妻をもつ韓国人男性が中国同胞代理母のもとを訪れ、

性交渉を行って子供を産ませた後、国際養子をとったように見せかけて韓国に連れて帰って来るものである。もう一つは、不妊夫婦の夫と開発途上国の女性との国際結婚を装った代理出産ツーリズムで、2007年7月、長年子供のできなかった不妊の妻とパートナー離婚してベトナム女性と再婚した韓国人男性が、女性に2児を産ませた直後に離婚し、子供達を取り上げて前妻と復縁した「ベトナム新婦シバジ事件」はその最たるものである。国際養子や国際結婚を装ったこれらの代理出産ツーリズムは、今日の世界の情報化を背景としたグローバル化の産物と考えられる。一方、高度不妊治療に行き詰った熟年不妊夫婦が、成功率が低く多額の費用のかかるホストマザー型代理出産を断念し、外国人女性との性交渉に訴えて子供を得ることを企むこうした代理出産ツーリズムは、その名の示す通り「シバジ」の風習を連想させるものである。韓国には、朝鮮時代後期に、子供の産めない本妻に代わって、自らの腹を貸し秘密裏に上流両班家の跡取り息子を産むことを生業とする「シバジ」(種受け女人)が存在していた。他方、庶民の間では男児を産ませるための「シバジ」として貧しい家の娘や寡婦が売買され、そうした因習に纏わる人身売買が今なお後を絶たないでいる。昨今の韓国において表面化してきた、国際養子縁組や国際結婚を装い中国同胞や途上国の女性を代理母に利用する代理出産ツーリズムは、そのような「シバジ」の風習が今日的形態をとって現れた「ローカリゼーション」の結果と考えられる。それと同時に、韓国において不妊夫婦が増加する中で、グローバル化の産物としての代理生殖ツーリズムが、内外の法制度や社会経済状況の変化と相まって「シバジ」の風習に回帰してゆく「ローカリゼーション」として理解される。

キーワード：グローバル化、生殖ツーリズム、代理出産、シバジ、ローカリゼーション、